

『六条葵上物語』 翻刻・注釈研究からみる擬人化された物語

伊藤	三好	畑有	菊間	樋口	末松
信博	俊徳	美紀	美帆	千紘	美咲

一・はじめに

『六条葵上物語』は、一九七七年に京都大学国文学研究室によって、愛知県にある明眼院^一から発見されたお伽草子である。筆者は道勝親王とされ、元和六年（一六二〇）に薨去していることから、室町後期から江戸初期に成立したと考えられる作品である。この明眼院や筆者については、『京都大学国語国文学資料叢書六』（臨川書店、一九七八年）が詳細に解説を行っているので、説明は省くこととする^二。

さて、この物語の題をみると、「六条葵上」と名付けられるところから、『源氏物語』の六条御息所と葵上の争いをパロディとした「論争物」にもみえる。しかしながら、「六条」とは「六条豆腐」であり、「葵上」とは、「蕎麦」の女房詞である。したがって、この物語は「食物」を擬人化した物語であり、内容は、「論争物」とも形態を異にしている。そして、食物を主題としたその物語からは、室町後期から江戸初期の食物を擬人化した物語を繋ぎ、新たな物語創作が展開する前段階の作品と考えられ、焦点をその部分に限って、分析を行いたい。

二. 作品の特徴

この作品には、蕎麦、六条豆腐、蕨、大根、独活、麩、梅干し、土筆、海苔、(青海苔、伊勢海苔、出雲海苔、富士海苔など)、座禪豆、納豆、芋、筍、若布、古布、随喜、蒿苳、蓮、茗荷、露などが擬人化されて描かれる。また、死後に地獄で苦しむこれらの食物が順に調菜の僧の夢に現れ、僧が経を詠み、彼らの弔いを望む物語である。

「食物尽し」で描かれている点では、『常盤の姥』や『猫のそうし』、『月林草』、絵巻では、『大黒舞絵巻』、さらに、『酒飯論絵巻』と同様の作品である。

『常盤の姥』では、「(前略)しろきこめかな、ひめにして、ゆをものまはや、しなくと、ゆ、かう、かんし、たちはな、けんしやくろ、くり、かき、なつめ、すも、りんごやなし(後略)」と死を迎えた老婆が様々な食を渴望する姿が描かれ、「南無阿弥陀仏、酒かな飲まふ。あら、腰痛や。膝痛や。のど渴きや。」「青海苔、あま海苔、とつさか海苔、その他万の海草、食いたやな。南無阿弥陀仏、あら苦し。」などと記され、「食物尽し」の良い例である。

そして、記される果蔬は、早蕨、松茸、平茸、栗竹(茸)、滑薄、椎茸、野老、葛の根、かのした(ハリ茸科の茸)、しめりたけ(シ

メジ科の茸)、鼠茸、つきよたけ、篠茸、梨、柑子、橘、柿、ゆこう、栗、桃、李、林檎、枇杷、山桃、岩梨、やまいちご、榎の実、あおむめ、かちくり、餅、白米、かるもちいなどである。

一方、僧の夢に現れる点では、室町後期の『猫のそうし』と同様である。この作品は猫と鼠の争いをテーマとしているが、後半部分には、「野老、蕨、鏡餅、花びら餅、煎餅、アラレ、かき餅、御興米」など食物も記される。

ただ、『六条葵上物語』では、それぞれの食物が当時にどのように調理されたか、また、どのような場面に使われたかが表現される点に特徴がある。「六条豆腐」は、「(前略)飲酒の科の酬ひゆへ、酒塩かけられて、乾く間もなき箸の雫にしためられて(後略)」、「大根」は、「新玉の春の始めの御祝に、菌固めと申す事の侍るは、餅の上に置かるるを鏡草と申すとやらん。確かならぬことなれども、受け給ひ置き侍るなり。」と調理法やその立場が記される。

「六条豆腐」は乾燥しており、最初に「削られて」と記され、その後、どのように調理されたのかが分かり、「大根」は、正月の鏡餅の上に当時は飾られていたことを記す。そして、この延長上にある作品が『月林草』であり、『六条葵上物語』より、その描写には、調理の仕方などが詳細に描かれている。

また、『六条葵上物語』、『月林草』は擬人化された食物が、幽

界から現れる点に特徴がある。『六条葵上物語』では、「葵上(蕎麦)」が「(前略) 辛きこの世に種子を残し、罪を犯すによりて、鉄の鍋の地獄に墮ち入りて、熱き湯を浴び、蓼、山椒に和へられて辛き目を見三、劍のごとくなる向歯、奥歯に噛み立てらるること、なほざりならぬ苦しみなり。願はくば、御僧經を読みて後を訪いて給ひ給へ。」と地獄の苦しみを説く。

「六条豆腐」も上記したが、「飲酒の科の酬ひゆへ、酒塩かけられて、乾く間もなき箸の雫にしためられて、悲しければ、浮世の人の情けは何ならず。ただよく跡を訪ひて給ひ給へ」と弔いを望むのである。

同様な描写は、『黄精』(狂言、天正本)にも現れる。僧と野老を掘り出す野老掘りの前に、野老の亡霊が登場し、「そもそも山深きところを鋤鋤にて掘り起こされて、三途の川にて、振り濯かれて、地獄の釜に投げ入れられて、くらくらと煮やうらかして暇もなきところを、御慈悲深き釈尊に掬い上げられ、少し苦患の暇かと思へは、包丁小刀おつとりもつて、髭をむしられ皮をたくられ、茶の子の数々(後略)」と、地獄に落ちて苦しみ、僧に弔いを望む野老の亡霊を描く^四。そして、当時の調理法も分かるのである。

一七世紀成立の狂言「大蔵虎明本」の「たこ」では、「(前略) 照る日にさらされ、足手を削られ、塩にさされて、(中略)、仏果

に至るありがたさよ。ただ一声ぞなむ阿弥陀仏(後略)」、「栄螺」では、「(前略) 打ち割りむしり取られて、塩をこまれ、(中略)、炭の火にあぶられて、角をもがる苦しみなるを、今あひがたき御法を受くるる角栄螺、(後略)」、近世では、「鯨」が、「身をづたくに、切れつつ。釜に煮らるる。其時は、灼熱地獄も目の前に、(中略) 適々御僧の、境遇により、御經読誦の功力にて、天上に生まれん(後略)」などと記される。

こうした特徴を考えると、この作品より以前に成立した『常盤の姥』や『猫のそうし』などのように、「食物尽し」や名所、名産品を表現するだけでは無いような印象を受ける。例えば、『多武峰延年詞章』「開口」が、鳥や山川草木、花、名所、『源氏物語』五十四帖などを擬人化し、争う表現を持つが、名所、名産品を列挙する構図であり、新たな年に向けての豊穰の祈りでもある^五。ただ、『六条葵上物語』に使用される地名などは『月王乙姫物語』の表現と同種であり、名所を列挙しているとも考えられる。

さらに、唐招提寺の修正会における「餅談義」でも、「(前略) 根本由来を尋ぬるに、天下泰平、五穀成就、伽藍繁栄の護摩餅、闇夜を照らす鏡餅、春は吉野の花餅、夏は富貴の牡丹餅、秋にもなれば、萩の花餅、冬は雪餅、烈しき嵐に氷餅、色黒うして味わいよきは奈良原餅、近江路や大津につける寿子餅、十万分身の栗餅、いずれも優しきは取り付き餅、松にかかれる藤の花餅、年を

重ぬるおおち餅（後略）^六など、餅の名産物を、場所を示して列挙したもする。一方、『六条葵上物語』が調理を詳細に説明する目的で記されたとも言い難い。

それよりも、本文で「葵上」が（前略）一切の草木叢林は、一地より生ひ出で候ふ。一雨に潤されて、仏に随ひて生長すと説かれたり。これ、しかしながら、万法一心、一心また万法なり。されば万物を躡す姿なれば、十界皆成仏の理をいふ所、すなはち草木国土悉皆成佛の理なり。」と述べるように、全ての「動・植物」も人間と同様に「成仏」の可能性を示唆するのであり、逆に、人間と同様に、地獄道に落ちる可能性もあることを示している。

実際、六条御息所と葵上は『源氏物語』では、様々な争いを行っており、この二人が、地獄道に落ちたと、当時の人々は感じていたであろう。その反映がこの物語の成立とも関係しているのは、当然であろう。

そして、「六条」や「葵上」のように、地獄に落ちた食物を擬人化して描くことは、当時の人々にとって、仏陀の救いを求める思想を、食物を通して、強く表現していると考えられるのである。逆に言えば、今まで、見向きもされなかった食物も六道輪廻の世界で生きている思想をも強く示唆しているといえよう。その意味では、新しい文化が芽生えているということもできる。

徳田和夫氏が紹介する江戸初期成立の『合戦巻』（伝季吟筆・

異類合戦物『合戦巻』^七では、多くの食物が擬人化の対象となっている。^八『六条葵上物語』やこの『合戦巻』、さらに『月林草』に鑑みると、「食」そのものが大きくクローズアップされる時代が誕生し、食物の擬人化を大きく促進する文化背景を持ったということができる。そして、「草木国土悉皆成仏思想」が、植物のみならず、食物にも対象を広げたことで、このような作品が成立したのではと考えている。

最後に、この本文・注釈は、授業と「絵ものがたり」研究会で、参加メンバー全員により検討され、末松美咲がその全体をまとめ、筆者が監修を行ったことを付記しておく。

三. 【校訂本文】

《凡例》

- 一 明眼院蔵写本『六条葵上物語』を底本とした。
- 二 通読の便を考え次のような措置を施した。
 1. 仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一した。その場合、もとの仮名は右傍に示した。
 2. 底本の表記を適宜漢字・仮名に改めた。その場合、原文を右傍に示した。また、原文にルビがあった場合はゴ

シックで示した。

3. 適宜、濁点・句読点を付し、行を改めた。

4. 会話、引用などは「」に入れて示した。

5. 「、」「〈〉」などの繰り返し記号は、漢字に続く「々」以外は用いないこととし適宜改めた。その場合、原文を右傍に示した。

6. その他、やむをえず本文を校訂する場合は*を付して注をほどこし、校訂の理由を示した。

ここに、ある男の侍るが、時は卯月の事なれば、長々し日の暮らし難きにて、習ひし仮名文詠みなどして慰み侍る折ふし、ある所の忌に籠り侍る御僧来たり給ひて、世の中の無常、有為転変の物語し給ふつゝ、**「調業する僧の候ふが、不思議の夢を見て候ふ。」**など語り出し給ふ。

「さらば、徒然の慰みに記し付けばや」と思へども、この男、生得筆取る事も心に任せず、言葉を続け侍らん事も叶はねども、あまりの不思議なる間、心に任せ、短き筆の遊みに書付け侍るなり。

これは、ある御方の年月勞り給ふ事ありしが、弥生の十日ばかりより重くならせ給ふ。同じき十九日の卯の刻の終に、居待ちの月の影薄く、雲隠れ行くに異ならず、朝日待つ間の程なく、本

の雫となり果つる。草葉の末の露のごとく消え果て給ふ悲しきは、彼釈尊の入滅にて、鳥獸物に至るまで、惜しみ悲しむ別れ路も、これにはいかで勝るべき。あるひは御子、あるひは御孫、御同胞の御出家様も、あまたおはしましけるその御中にも、御歳勝りたる御方は、姉齒の松の待つことに、何を馮みて永らふらむ。老少不定とは言ひながら、老たるは先立つべきに、残り留まれる老蘇森、言の葉なしと憧れ給ふ御心の中、推し量られて理なり。御妹の御方には、歳のみ若浦、浪立ち遅れ給ひつつ、さても尽きせぬ御名残を、誰に弓弦の音に立てて、泣き給ふより外の事ぞなき。惜しむ甲斐なき月も日も、今日よ明日よと暮れ行くまゝに、七日七日の御仕業営み給ひけるに、色々の汁・菜を盛りたる中に、蕎麦を和えたと六条を削りたるとあり。調業の人寄り合ひて、「これをばいづれを上置き、いづれを下に置くべきぞ」とて、とかく問答におよべり。

傍らにありける人の申す事には、「おもしろき争ひかな。古今の序には『人丸は赤人の上にならん事難く、赤人は人丸が下に立たん事難し』などこそ侍るに、これは興ある御問答にて候ふぞや」など戯れけり。

その僧、昼の経宮にくたびれて、まだ宵より枕を傾ける所に、昼盛りたりつる蕎麦、夢に見えて申すやう、「哥や連哥の言葉にあへ物と申すは、物にあやかると申す事にて、かつは昔の人にあ

やかりて、我が身の上を申すべし。紫式部の筆のゆかり、光源氏の物語書さあらはせることの侍らずや。その名こそ蕎麦とは申し侍れ。まことは、葵上と言はれて、源氏の君の十二にて元服し給ひしその夜より、御添い伏しと定められ給ひて、御門よりの御哥にも、

いとけなき はつ物ゆひに 永き夜を 契る心は 結び込めつや
と遊ばして、父大臣に賜りしに、

結びつる 心も深き 元結に 濃き紫の 色しあせずは

と御返哥申させ給ふ。やがてその夜、同じ車にて出給ひしかば、二葉より本妻の契りありて、夕霧を生み置きたりし我が身なれば、いかでか人の下に入るべき。これより後は、この趣よくよく心得給ひなば、亡き後までも嬉しうこそ侍らめ。もしなほ下に置かるべくは、我が身の上の罪を留め給へ。辛きこの世に種子を残し、罪を犯すによりて、鉄の鋼の地獄に堕ち入りて、熱き湯を浴び、蓼、山椒に和へられて辛き目を見、剣のごとくなる向齒、奥齒に噛み立てらるること、なほざりならぬ苦しみなり。願はくば、御僧経を読み後を訪いて給ひ給へ。」

此の僧、夢のうちに申すやう、「いかなる経を読み、吊ひ候ふべきぞ。」*1問ひければ、「法華経は諸佛出世の冥利なり。何事かこれに勝るべき。殊に草木のことを説かれたれば、葉草喩品を誦誦し給へ。『一切の草木叢林は、一地より生ひ出で候ふ。一

雨に潤されて、仏に随ひて生長す』と説かれたり。これ、しかしながら、万法一心、一心また万法なり。されば万物を顕す姿なれば、十界皆成仏の理をいふ所、すなはち草木国土悉皆成佛の理なり。しかれば一味の法雨を受けて、万物生長するは葉草喩品の心なり」と細かに言ふを聞いて、心肝に染みて覚えける。

また片つ方に、削り立てたる髪の上、乱れたる心地しもなく、気高く見えたる姿あり。よくよく見れば、六条御息所なり。「何故にかようにてましますぞ」と問ひ奉れば、「これは先坊に契り結びしに、後れ奉りし後は、忌の設けの御時に盛り置かれたる齋宮を具し奉りて伊勢に下り、返り上りては、万につけて人目を包むのみなるに、今御齋の菜になりて、葵上と上下を争ふ戯れごとを便りとして、ただ今ここに立ち寄りたり。申すにつけて憚りある事なれども、葵上と申すは、御母は桐壺の御門の御妹、それはやごとなきことなれども、摂政の北の方になり給ひぬれば、徒人とや申すべき。我は先坊に契り、秋好を生み置きたりし我が身なれば、徒人には準へ給ふべからず。しかるを上下を争ふ事は、心得候はぬ事とは思へども、よしやこれは我慢なり。我昔持経怠ることなし。それを慢ぜし心より、魔道に堕ち、これさへ心の愛宕山、比叡の大嶽、比良の高根、心つくしの彦の山、国々、所々の魔所を栖とせり。ややもすれば、宿縁 昔を忘れずして、古宮の跡に立ち返り、経誦む者あらじと、心の中に「万寿万寿の

「番の鶯」と飛びざらぬも、我が妄念の故ぞかし。よくよく思へば、因果の程、あさましきことは候はず。御斎の菜となれる物、いかほど多き、その中に、葵上と六条と上下を争ふことの侍りて、後の世までの物語、加茂の祭りの物見車、所狭きまで立ち並べしに、ことに人目を忍び、車を人溜への奥に押しやられて、深き思ひをし、血をしおられて、百度燻る煙の物見、我身ひとつに掻き集めて、やらんかたなかりし。古の恨みの末の生霊、たまさかにも立つ名をば厭ふ習ひの世の中に、亡きまでも留まりて、朽ちせぬ名こそ口惜しく候へ。由なき昔の物語申しても無益なり。葵上の望みの如く、我も昔は持経者なり。大乘妙典を読み給ひて、後生善所と廻向し給へ。幼かりし時よりも内住みして、先坊に枕を交はせしに、明暮酒宴を専らにせし。飲酒の科の酬ひゆへ、酒塩かけられて、乾く間もなき箸の雫にしためられて、悲しければ、浮世の人の情けは何ならず。ただよく跡を訪ひて給ひ給へ」と申せば、「安き程のことなり。御経読みて奉るべし。げにや、受け給ひおよび候へば、光源氏の御心通ふ御方々はあまた侍る御事に、文の言葉の哥のさま、優にやさしき御事は、御息所にこそましますに、都のうちを振り捨てて、『鈴鹿川、八十瀬の浪に濡れ濡れず』など詠じ給ひて下り給ひしかば、世の中名残りなく覚え給ひしことぞかし。懺悔のひとつともなるべければ、一首遊ばし給へ」と申せば、とりあへず、

やすからぬ 身の後の世の ある物を みやす所と 何いはれけん

と詠み給へば、「げにも」と覚えておもしろし。

また、異皿に盛られたる蕨のありけるが申すやう、「葵上六条御息所の事、これみな源氏の物語なり。例へて申すも便なけれども、*紫塵の蕨と申す事の待れば、蕨に付けて、紫は縁ある言葉なり。葵上と申せしは、源氏の君、瘡、呪いに、北山寺に出で給ひしつゝあでに、初草の若紫の上を見つるより、旅寝の袖を絞り染めて、忘るる間なく覚え給しが、つひに迎へ取り、御親の兵部卿の宮にも深く忍び給ひし上は、まして、並べての人には誰にも知らせじと隠し給ひし事なれども、まことに紫塵の若き蕨、人手を握り、碧玉の寒き朝、鍬囊に脱する理なれば、遍く知らぬ人もなし。とりわきときめき給ひし人の縁なれば、恥づかしながら申すなり。これのみならず、早蕨の事、宇治の優婆塞の宮の御向ひの寺に籠り給ひて、そのまま空しくなり給ひしに、姫宮たち、かの古宮に残り留まり給ひしかば、『我なくて草の庵は荒れぬとも』と、のたまひ置きし言の葉を、枯れぬ契りの証しにて、明けぬ暮れぬと過ごし給ひしに、僧都の御方よりとて、早蕨持ちて参りたり。その時の哥に『常を忘れぬ初蕨なり』とありし。その返哥に、

この春は 誰かに見せん 亡き人の 形見に摘める 峰の早蕨

と侍りし。今のやうに覚え、いとど亡き人の面影、恋しうこそ侍れ。これも源氏の物語、哀れとも聞き給へ」とて、憂かりつる世の古ことども、手を折りてこそ数へけれ。

また、大根もその中にありけるが、「うらやましの御方々や。とりどりに懺悔の物語して、跡を訪はれ給ふ事よ。我が身の上の事、何事を申さんとも覚え候はず。さりながら、是非を申さで、ただ弔ひ給へと申さんもおがまし」とて、この大根もからからとうち笑ひ申しけるは、「新玉の春の始めの御祝ゐに、菌固めと申す事の侍るは、餅の上に置かるるを鏡草と申すとやらん。確かならぬことなれども、受け給ひ置き侍るなり。さもあると覚ゆるは、明石紫の姫宮の餅鏡に向かひ給ひし時、『溶けぬる池の鏡には、世に曇りなき影ぞ並べ』と源氏の君も遊ばしたり。紫上の御哥にも、

曇りなき 池の鏡の よろづ代を 住むべき影ぞ しるく見えける

と祝ひ給ふ。これ、菌固めの時、鏡の上に大根引き渡したりし寿なり。いかなる貴き人々にも、歳の始めの御祝ひにはいただかれ参らすれば、さのみ賤しく思ひ給ふべからず。よしや賤しくとても、仏法に上下あるべからず。金剛般若の經文にも、『是法平等無有高下』と説かれたれば、貴き賤しきは入り候ふまじ。御利益にて候ふべし。幸ひ我が名を説かれたる經文あり。それを

唱へて給ひ給へ」と申せば、「何れの御經に候ふぞ」と問ひければ、「もし御忘れ候ふやらん。『大根大茎大枝大葉』と候ふ。法華經の三の卷に侍ると覚え候ふなり」と申せば、「さることの侍るぞや。必ず誦誦して廻向申すべし。心やすく思ひ給へ」と約束するに、また次に独活のありけるが申すやう、「早蕨の物語に、北山にての事どもふと思ひ出でて申すなる。『優曇華の花待ち得たる心地して 深山桜に目こそうつらね』と、かの僧都の詠じ給ひしなり。『是人甚希有過於曇華』とも説かれて候ふは、我が名を表す經文なれば、これを讀みて訪ひ給へ」と、とりどりの望み申しけり。また、油炒りの麩のさしみ、一首の哥をぞ詠じける。

油注し 御あかし灯し 後の世を 迎る閻路の 光灯せん
と口ずさみける。

梅法師と土筆とは、師弟の契約しける故、辺り近くぞ候ひける。此土筆をば、田舎の民の申し習はしたる異名にて、法師と申すなり。弟子の梅法師、土筆の顔を見て申すやう、「もとより我らは法体なり。あながち人を雇ふべきにあらず。自ら經を讀み念仏を申しこそせめ」と語らひければ、こんにやく、頭押し剃りて、同じく出家の姿に身をやつす。牛蒡もかせ髻押しこそげ、「御弟子に参るべし。構へて構へて、我をば小坊主になして給ふべし」とぞ望みける。

さても海苔の品々を尋ねぬるに、青海苔、伊勢海苔、出雲

海苔、富士海苔、この中に、いづれの海苔が貴かるべきと思ひ巡らすに、思ひの家を出雲海苔を信仰するもあり。上もなしとて、富士海苔を心にかくるもあり。

また、座禅豆のありけるが、納豆に向かひて申すことは、「あさましと。夜る昼る別かず寝給ふ事よ。魔性の眠りとて深く戒め給はずや。我は本より禅宗なり。専ら座禅をまめにしして、一千七百則の工夫をなし、直に極めんといふ。はう山は徳山の会下に入りて一法を与へられて悟りを得、臨済の喝に臨めばと聞く。言はで出湯を飲まん」とのみなり。

芋、頭擡げて申しけるは、「さる人の問答に『慥慥なるとき如何』と問ふに、『煮て食うもよし、焼きて食うもよし』と答へけるとかや。これ已々が三昧なり」と。調菜つくづく聞きて、「かやうの物に至るまで、後世菩提に心をかけぬはなし。たまたま仏体具足の身となりて、いたづらに明暮を送り、ここにて人身を失却せば、未来永々さてやいつの時をかせん」と嘆く所に、梅尾辺より出でたる莖のありけるが、我は唱導の中にて育ちたれば、管弦の道を心得たり。御汁に拵へられたる竹の子の糸竹の調べを調べ給へ。付け物申し侍るべし」と言ふ。

げにや、莖をばつけ物と申せば、興ある言ひ事かなと思ふに、薑のありけるが、我も唱歌申さんと言ふ。かれこれおもしろき取り合わせなり。

また、若布を刻みて盛りたるが、古妻は味はひ悪しとて、下盛りりにこそなされけれ。古妻の心に思ふやう、「我も昔は嫁入りして若妻と言はれ、賞翫せられしに、年ほど憂き物は候はず。いづのほどに古臭しとて嫌はれて、下に押し込めらるる事よ」と倦じ、定家卿の「海松布なきさのたくひかは 上せく袖の下の思ひは」と詠じ給へる言の葉、さながら我が上なりとて千尋の底の海松房のごとくなる髪剃り落とし、浦に住む尼の姿に身をやつし、遂に浪の底にぞ入にける。

芋の莖の申す事には、「さまざま法文ども受け給ふに、ありがたくこそ覚へ候へ。我も望みを申すべし。随喜の一念は五十二展転までも功德ありと*3と説かれたれば、我が名の徳を表して、随喜功德品を誦誦し給へ」となん。

そのなかに萬首のありけるが申すやう、「自慢のやうなる申し事に候へども、我らかやうなる智者は、仏法をも心得わけ候ひぬ。さもなからん愚痴の輩は、いかにして仏道に入り候ふべきぞ」と言ひければ、*4蓮のありけるが申すやう、「そのためにぞ世の悲願あり。弥陀の力を頼むより他の事あるまじ。ここにて一人念佛すれば、すなはち極楽の宝池にひとつの蓮華生じて、その人の臨終に華台となりて、観音勢至、これを捧げて来迎し給ふ時、その台に乗りて往生すると見えたり。その文に『*5此界一人念佛名西方便有一連生』、この要文分明なり。疑ひなく信ぜば、

無智の厄入道も往生するなれば、有智にも無智にもよるべからず」と、細かにこそ教へけれ。

さるほどに、若荷の申やう、「あらありがたの事を受け給ふ物や。我は鈍根草と言はれて、御経の一個をも法文の一句をも聞き保つこと叶はず。自力修行の事は思ひもよらざる所に、『南無阿弥陀仏』と申せばいかなる鈍根の女人・闍提も往生すると受け給ふ。かやうの悲願に遇ふこと、しかしながら冥加にてこそ候へ」とて、歡喜なのめならず。

また、落のありけるが申す様、「仏法も富貴の家にと申すことの候ふ。いかにも御賞翫ありて富貴自在、家門繁盛におはします候べし」と言ふ。

僧は、「夢の直路を確かに覚えて語りける」とてまた物語りし侍るを、かやうに書き付け侍るなり。狂言綺語ながら、御覽ぜん人々は御経読み念佛申して、「三界万靈、六親眷属、草木国土悉皆成佛」と廻向し給ふべし。

*₁ 原文「とふらいければ」「ふら」左傍に見せ消ちあり。文脈から「といければ」と校訂した。

*₂ 原文「しちん」右傍に「紫塵」と漢字をあてる。

*₃ 原文「とかれたりは」「り」の左傍に見せ消ちあり、右傍に「れ」と振る。

【注釈】

○忌に籠り侍る…清浄なものを保つためにそれを日常の生活圏から遠ざけることを「斎」と言うが、「忌」とは反対に、不浄なものである「穢れ」に接触しないために、それを日常生活の場から隔離することを指す。また近親者の死去によって、身を受けた死の穢れを他にうつさないために、一定期間喪に服して慎み籠ることを「忌籠り」と言う。

○無常…人の生存をふくめ、この世の一切のものは常に生滅流転して移ろいゆくものであり、永遠不変のものはないということ。

○有為転変…この世の現象は、さまざまな因縁の絡み合いによつて生じたものであるため、恒常性がなく、絶えず移り変わるものであるということ。

○調業…業（副業物）を調えるという意で、食べ物の味付けをし、しかるべき料理に仕立て上げること。またその料理それ自体や、料理人をいう。

○筆の遊び…気の向くままに慰みに書くこと、またはその書かれたものこと。慰み書き。

○居待ちの月…満月を境に月の出が次第に遅くなり、座つて月が出るのを待つことから、
陰曆十八日の月のこと。特に、季語として八月十八日の月を指

- す。
- 本の雫：草木の根もとから落ちる雫のことで、人の命の儂さをたとえていう。ここでは「ある御方」が亡くなったということ。また「末の露」とならべて使用され、葉末の露も、根もとから落ちる雫も、後先はあれ必ず消えてしまふものであることから、人の寿命に長短はあっても死ぬことに変わりがないことを示す。『古今和歌六帖』に「末の露もとのしづくや世の中のおくれさき立つためしなるらむ」とある。
- 末の露：前「本の雫」項。
- 姉菌の松：歌枕。宮城県栗原市金成姉菌にあった松で、小野小町の姉あるいは松浦佐用姫の姉の墓上に植えた五葉松のことといわれる。ここでは、亡くなった僧の姉に掛ける。
- 老少不定：人生は儂いもので、必ずしも老人が早く死に、若者が遅く死ぬとは限らないということ。ここではさらに「とは言いながら」と続け、そうは言っても老いた者が早く死ぬものであるとしている。
- 老蘇森：歌枕。滋賀県近江八幡市にある奥石神社の森のこと。年老いた姉の「古い」に掛ける。
- 若浦（和歌浦）：歌枕。今の和歌山市南部、和歌の神を祭る玉津島神社のある片男波の入り江一帯を指す。古くは「若浦」と書かれたが、『万葉集』以来歌とのかかわりが深く、「和歌浦」に変化した。「若」、あるいは歌の意の「和歌」をかけることが多い。ここでは年若い妹に掛けている。
- 七日七日：人の死後に初七日から四十九日まで七日目ごとに営む死者の追善供養のこと。
- 六条：六条豆腐のこと。豆腐を薄切りにして塩をまぶし、乾燥させた食品。
- 古今の序には「人丸は赤人の上にならん事難く、赤人は人丸が下に立たん事難し」などこそ待るに：『古今和歌集』序文に、「人麿は赤人が上に立たむことかたく、赤人は人麿が下に立たむことかたくなむありける」とある。
- 肖へ物：「肖え物」は似るべき目あて、標準となるもの。あやかりもの。これに料理の「和え物」をかけるか。
- 葵上：『源氏物語』の登場人物。主人公光源氏の正妻で、源氏との間に夕霧をもうける。左大臣の娘。源氏の愛人である六条御息所の生き霊に悩まされ、夕霧を産んだのちに急死する。『大上臈御名之事』に「そば、あをい」とあり、女房詞で蕎麦を「葵」と表現する。ここでは蕎麦と葵上をかけている。
- 添い伏し：東宮や皇子などの元服の夜、選ばれて傍らに添い寝する公卿などの娘のこと。
- いとけなき はつ物ゆひに 永き夜を 契る心は 結び込めつ や／結びつる 心も深き 元結に 濃き紫の 色しあせずは

- … 『源氏』 「桐壺」 卷での帝と左大臣との贈答歌。
- 二葉… 幼少の頃のこと。
- 夕霧… 『源氏』の登場人物で、葵上と光源氏との間の子。光源氏の長男。
- 我が身の上の罪… 『源氏』の葵上が罪のために墮地獄したという話は他ではあまりみられないが、ここでは墮地獄に至る葵上の罪として、夕霧を浮き世に産み落としたことが語られている。
- 法華経… 大乘仏教の重要な経典のひとつである「妙法蓮華経」の略称。
- 諸佛出世… 仏が衆生救済のためにこの世に現れること。
- 冥利… 仏菩薩によって知らず知らずの間に与えられる利益のこと。
- 薬草喻品… 法華七喻のうちのひとつ。慈雨がさまざまな種類の草木の上に一様に降り注ぐように、どのような衆生であつても等しく仏陀の教えによって悟りを開くことをたとえる。
- 万法一心… 万法一如。法華経の教えで、すべてのものの本性は空であり、帰するところは一体であるということ。
- 十界皆成仏… 十界のすべてのものが成仏するという法華経の教え。
- 草木国土悉皆成佛… 『中陰経』にあると言われてきた偈の一部。草木や国土のようなすべての非情のものも、有情のものと同じくことごとく成仏できるという意味。
- 六条御息所… 『源氏』の登場人物に干し豆腐の六条をかける。『源氏』の六条御息所は大臣の娘で、桐壺帝の前東宮の后。前東宮との間に一女をもうけたが、前坊と死別したのち、源氏と恋仲になる。激しい嫉妬のあまり、生き霊となって源氏の正妻である葵上をとり殺すなど、感情の起伏が激しいところがある。「賢木」巻で斎宮に卜定された娘（のちの秋好中宮）とともに伊勢に下ったが、斎宮の任期が終わると帰京、六条邸に住した。
- 前坊… 前東宮のこと。
- 斎宮… 六条御息所と前坊の間の子である好中宮のこと。さきに伊勢の斎宮であったため、ここでは菜・具とかけられる。
- 御母は桐壺の御門の御妹… 葵上の母は桐壺帝の同腹の妹。左大臣の北の方。
- 撰政の北の方になり給ひぬれば、徒人とや申すべき… 「撰政」は葵上の父である左大臣をさす。『源氏物語』中で撰政に就いたのは左大臣のみ。「徒人」は天皇や皇族に対して臣下の身分の者を言い、葵上の母は出自こそ高貴であるが臣下の妻となつたため、徒人と同じであるという意味。
- 我慢… 仏教語。人間の煩惱のひとつで、強い自我意識から生じる、自らを高く見て他人を軽視する心のこと。仏教では、自

己に執着する「我執」から起こる思い上がりの心を「慢」と呼び、その心理状態を三慢・七慢・九慢に分析して説くが、「我慢」はこの七慢のうちのひとつである。

○我昔持経忘ることなし：「持経」は経を常に身近に置いて毎日怠らず読誦すること。『源氏』の六条御息所にはこのような記述はない。

○それを慢ぜし心より、魔道に堕ち、これさへ心の愛宕山、比叡の大嶽、比良の高根、心つくしの彦の山、国々、所々の魔所を栖とせり：「魔道」とは欲界のうち、悪魔が住む世界のことをいう。「魔所」はその悪魔が住む場所。愛宕山、比叡山、比良山、英彦山はいずれも天狗が住むとされる山であり、驕慢によつて魔道に堕ちたとして、ここでの六条御息所は天狗道に堕ちたと考えられる。『源氏』の六条御息所の記述とは一致しないが、これは『源氏』とは異なるもうひとりの六条御息所を描いた謡曲『榎天狗』の影響と考えられる。『榎天狗』では六条御息所と名乗る女性が天狗道に墜ちたことを語るが、ここでの六条御息所は『源氏』の登場人物ではなく、白川上皇の皇女である郁芳門院媞氏内親王である（沢井耐三「謡曲『榎天狗』——もうひとりの六条御息所——」『室町物語研究 絵巻・絵本への文学的アプローチ』）。その語りには「我は六条の御息所なるが。我一天の虚空として。美女の誉慢心となり。又一乗

妙経を片時も懈る事なければ。これ又却つて慢心となり。二の心の障故。魔道に落ちて天狗にとられ。この愛宕山をすみかとせり。すはまた時も。来るかは。く。雲の波山の波の。立ちくる粧愛宕の山の天狗に。とられて失せし六条の。御息所といはれしが。身は安からぬ魔道の苦患御覽ぜよ。く。とあり、ここでの記述と合致する。

○古宮：旧六条邸のこと。

○万寿万寿の番の鷹：郁芳門院の御所六条院の故地に建立された六条御堂は「万寿禅寺」と改められたが、その万寿寺にまつわる伝説に、郁芳門院が天狗道に墜ちたこと、万寿寺の松に番の鷹が住んだことが語られている。（安達敬子「六条御息所異聞——『六条葵上物語』から——」『国語国文』八二二号）

○因果：原因と結果の意味。今ある物事が以前（前世）の何らかの物事の結果であり、また将来（来世）の何らかの物事の原因となつていくということ。ここでは、お斎の菜となつて葵上と所争いしているが『源氏物語』での車争いとかけている。

○持経者：経典、とくに法華経を受持読誦する者を言う。『源氏』の六条御息所が持経者であったという記述はないが、ここで豆腐が自らを持経者として語っているのは、前述した謡曲『榎天狗』による。

○大乘妙典：大乘の教えを説いた経典のことで、一般に法華経

を指す。

○後生善所：死後、極楽浄土へ生まれかわること。『法華経』薬草喻品に「是の法を聞き已に於て、現世安穩にして後に善処に生ず」とある。

○廻向：一般に、故人の冥福菩提を祈つて読経や念仏をし、供養すること。

○飲酒の科：酒を飲んだことの罪。仏教では、飲酒が過失や犯罪の原因となることからこれを戒め、「飲酒戒」として五戒のひとつに数える。

○酒塩：塩酒は酒を料理の材料にかけることであるが、材料の風味が落ちることもあり、少量の塩を入れることが多い。また、酒に塩はつきものともなっており、この場合、塩と酒と考えられる。

○鈴鹿川、八十瀬の浪に濡れ濡れず：『源氏』「賢木卷」で、六条御息女が伊勢に発つ際に源氏と交わした歌「鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず伊勢まで誰か思ひおこせむ」のこと。

○やすからぬ 身の後の世の ある物を みやす所と 何いはれけん：典拠不明。「やすからぬ身」という語には『楳天狗』中にある「身は安からぬ魔道の苦患御覽ぜよ」の影響がある。「我が身の後生は穏やかなものではないのに、みやす所とどうして言われるのだろう」の意。

○紫塵の蕨：「紫塵」とは紫色のことを言うが、その色から蕨のこととさす。

○紫 上と申せしは、源氏の君、瘡、呪いに：以下『源氏』「若紫」巻を引く。

○旅寝の袖：同「若紫」巻にて源氏が若紫を見初めて詠んだ「初草の若葉の上を見つるより旅寝の袖も露ぞ乾かぬ」を引く。「旅寝」とは、旅先で寝ること。

○紫塵の若き蕨、人手を握り、碧玉の寒き朝、錐囊に脱する理：『和漢朗詠集』に「紫塵の嫩き蕨は人手を握る、碧玉の寒き蘆は錐囊を脱す（小野篁）」とある。物事があらわれやすいことをたとえる。ここでは、隠していたにもかかわらず光源氏

と紫上の関係が広く知られてしまったことをさす。

○宇治の優婆塞の宮の御向ひの寺：「優婆塞の宮」とは一般に、在家のまま戒を受けて仏道修行をする親王、内親王をさす。ここでは『源氏』の登場人物。桐壺帝の第八皇子で、光源氏の異母弟。優婆塞として宇治に住し、宇治八の宮と呼ばれた。

○我なくて草の庵は荒れぬとも：『源氏』「椎本」巻「我なくて草の庵は荒れぬともこの一ことはかれじとぞ思ふ」を引く。○常を忘れぬ初蕨なり：『源氏』「早蕨」巻で阿闍梨が詠んだ歌「君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初蕨なり」を引く。

- この春は 誰かに見せん 亡き人の 形見に摘める 峰の早蕨
 ……前項同場面より、中の君が阿闍梨に返した歌。
- 新玉の春の始めの御祝るに：以下『源氏』『初音』の描写を引く。
- 歯固め：「歯」は「齡」のことで、年齢を固めという意味。正月の三が日に鏡餅・大根・瓜・猪肉・鹿肉・押鮎などを食べ、て長寿を願った行事。
- 鏡草：宮中で元日に鏡餅の上のせた大根の輪切りのこと。また、大根の異名。
- 明石紫の姫宮：明石の君の娘で、紫の上に引き取られた明石の姫君を指す。
- 餅鏡：鏡餅のこと。
- 溶けぬる池の鏡には、世に曇りなき影ぞ並べる／曇りなき池の鏡の よろづ代を 住むべき影ぞ しるく見えける：『源氏』『初音』巻での光源氏と紫上の贈答歌。
- 金剛般若：金剛般若経のこと。般若経系の大乗經典のひとつ。空・無我の道理を説いて、特に禪宗で重視される。
- 是法平等無有高下：『金剛般若経』に「復次須菩提。是法平等無有高下。是名阿耨多羅三藐三菩提。以無我無人無衆生無壽者。」とあり。
- 大根大莖大枝大葉：『法華経』卷三「葉草喩品」に「小葉中

- 根中莖中枝中葉大根大莖大枝大葉」とある。
- 優曇華の花、待ち得たる心地して、深山桜に目こそ映らね：『源氏』『若紫』巻「優曇華の花、待ち得たる心地して、深山桜に目こそうつらね」
- 是人甚希有過於曇華：『法華経』『方便品』に「則爲已供養一切三世佛、是人甚希有過於曇華」とあり。
- 思ひの家を出雲海苔：「思ひの家」とは、「思ひ」の「ひ」に「火」を掛けて、火の家「火宅」を意味し、煩惱の多い憂き世の中のことを指す。それを出ることに「出雲」をかける。
- 梅法師：「梅干」の「ほし」に「法師」をかける。
- 此土筆をば、田舎の民の申し習はしたる異名にて、法師と申すなり：「つくつくし」は土筆のこと。時代は下るが、『倭訓栞』には「つくくし」筆頭菜をいへり、東国につくしともいふ、作州にははふしといへり」とある。
- 同じく出家の姿に身をやつす：「出家」に「湯漬け」をかける。
- かせ髻：「かせ」は接頭語で、名詞に冠してそれがいかにも貧相な様子であることを示す。ここでは、牛蒡の髻が貧相であることをあらわすが、牛蒡のひげ根をイメージしたもの。
- 一千七百則の工夫：禪宗でさとりを開かせるために与える問題を公案といい、古来の祖師が示した言葉や動作など、宗要をあつめて参禅者に工夫させるものであるが、そのすべてを通じて

て約一七〇〇則あるといわれることから、一千七百則の公案と称される。公案の唱出は中国唐代に始まるが、宋・元代になって盛行し、主に臨済系の禅僧が盛んに用いて、公案禅の禅風が起った。

○はう山：不明。あるいは、徳山の弟子で雪峰山に住した雪峰義存のことか。

○徳山：中国、唐代の禅僧徳山宣鑑のこと。姓は周氏。若くより律や唯識を学んだが、のち禅を学び武陵の徳山に住した。その修行は厳格であったと言われる。

○臨済の喝：『伝灯録』『臨済の喝徳山の棒』による。禅宗修行の厳しさをたとえて、臨済禅師はよく大喝を与え、徳山和尚はよく痛棒を加えたことから言う。

○言はで出湯を飲まん：不明。

○恁麼：副詞的に用いて、「このよう」「かくのごとく」の意を示す。もと中国宋代の俗語であるが、禅宗とともに伝わり、禅僧の間で用いられた。芋に掛ける。

○梅尾：京都市右京区梅ヶ畑の一地区で、高山寺の所在地。

○糸竹：和楽器の総称で、「糸」は琴・三味線などの弦楽器、「竹」は笛・笙などの管楽器を意味する。管弦。

○付け物：雅楽で、楽器の伴奏を付けること。

○薑のありけるが、我も唱歌申さんと言ふ：「薑」は生姜の

異称。唱歌と生姜をかける。

○海松布なぎさのたぐひかは 上せく袖の下の思ひは：『六百番歌合』藤原定家「氷るる みるめなぎさのたぐひかは うへおく袖のしたのささ浪」よりの引き歌。

○千尋の底の海松房のごとくなる髪：『源氏』『葵』巻「はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆく末は我のみぞ見む」を引く。

○法門：諸仏の教法。仏の教え。仏教。

○随喜の一念は五十展転までも功德あり：『法華経』『随喜功德品』の「亦随喜転教、如是展転。至第五十」による。法華経を聞いて随喜した人が次々と他の人に語り伝え、五〇人目に至っても経の功德に変わりはないということ。

○高莖：日本で古くから栽培されたカキヂシャ。結球しない種類で、下から葉をかき取って使用する。ここでは「智者」の意とかけている。

○世の悲願：「超世の悲願」か。「超世の悲願」は、他の諸仏・諸菩薩の悲願に比べて超絶している意で阿弥陀仏の四十八願をいう。または、その中心である第十八願。超世の本願。

○極楽の宝池：極楽浄土にあるという八功德水をたたえた池のこと。

○此界一人念佛名西方便有一連生：空阿弥陀仏の念仏で、唱え

おわることに唱えたもの。

○鈍根草とんこんそう：茗荷の異名。「鈍根」とは、生まれつき頭の働きの鈍いことであり、その性質を表して言う。またここでは、仏道を理解する能力が劣っていることを示す。

○闍提せんとく：「一闍提」の略。仏法を信することなく、仏法の素質をかく者。

○冥加みやうか：神仏の加護、恩恵のこと。茗荷とかける。

○狂言綺語きやうげんきご：道理に合わない言葉と巧みに飾った言葉。仏教や儒教の立場から、いつわり飾った小説、物語の類をいやしめて言う。

○三界万霊さんがいばんれい、六親眷属ろくしんせんぞく、草木国土悉皆成佛そくくわんとくしつがいせつぽう：「三界万霊」は欲界、色界、無色界の三つの世界にいるすべての霊のこと、「六親眷属」はいつさいの血族や姻族、「草木国土」は草木や国土のように非情なもの、これらすべてが具有して成仏するという意。

注

- 一 愛知県海部郡大治町にある天台宗の寺院で、日本最古の眼科専門の医療施設とされる。
- 二 『六条葵上物語』今西祐一郎、一三三～一五五頁。
- 三 『徒然草』第六九段の性空上人を描く段に「辛き目」と表現し、豆の

殻を擬人化して記す場面がある。

四 『新日本古典文学大系五六』「狂言歌謡」百三十三、三七八～三八九頁、岩波書店、一九九三年

五 『続日本歌謡集成』巻二、五二～六四頁（東京堂出版、一九六一年）
関口静雄『秋篠文化』四号、「唐招提寺 修正会と声明」四九～六〇頁、二〇〇六年。

七 『学習院大学紀要』第八号七～二十頁、二〇〇六年。

八 食物は、蕨、蕨、蕨、苜蓿、苜蓿、末摘花（ベニバナ）、鏡草（大根）、夕顔、鬼燈、薺、榎、木耳、朝菜、夕菜、葛の葉、薊、卯の花、鑑草、蓮、薤、繁縷、靱草、土筆、錦草、ゆきのした、筍、瓢箪、蕪、仏の座、岩梨、杉菜、稲、蒜、犬蓼、巴豆、芹、蓼、鼓草、えび葛（葡萄）、茗荷、壁生草、深見草（牡丹）などが記される。